

第3節 6区④の調査

1. 調査の経過

6区④は、6区②の南側に位置する調査区で、平成20年度に発掘調査を実施した。

調査区全体を一度に掘り下げるには、排土を十分に処理できる場所が近くになかったため、調査区を二分して、東側を発掘後に天地返しをして西側を発掘することとした。調査区の設定にあたっては、南側の道路や北側の水路に影響が出ないようにするために控えをとり、また、壁面の崩落を防ぐため、安全勾配をとって発掘したことにより、結果的に東西長約80m、南北幅約7~8m（下端幅で約3~4m）の細長い調査区となった。発掘調査面積は580m²である。

5月下旬から調査区東側の表土や旧伊努谷川による堆積砂礫層を重機で掘削し、標高約3mまで下げた。この時点では山持遺跡全体で見られる黒色腐植土層（基本層序Ⅱ層、いわゆる「オモカス層」）は確認できず、6区②の遺物包含層（Ⅳ層）上面とほぼ等しいレベルで、黒色土（第18図I-17層）が見られた。このことから、当調査区では黒色腐植土層は旧河道によって削られておらず、すでに遺物包含層に達したと考え、5月30日から人力による掘削を開始した。黒色土上面では杭列を検出し、これらの記録をして、黒色土を掘り下げたところ標高約2.5mで腐植土層上面を検出した。6区②のレベル（標高約3.2m）と比べかなり低く、腐植土層は旧河道で削られたのではなく、周囲と比べて落ち込んだ部分に堆積していたことがこの段階で明らかになった。腐植土層下面からその下層の黒色粘質土では弥生時代後期末頃～古代の遺物が出土し、その下の灰色系シルト層上面では溝、土坑を検出した。これらの遺構を完掘・記録し、調査区内を10cm間隔の等高線を測量して、調査区の写真撮影を行った。

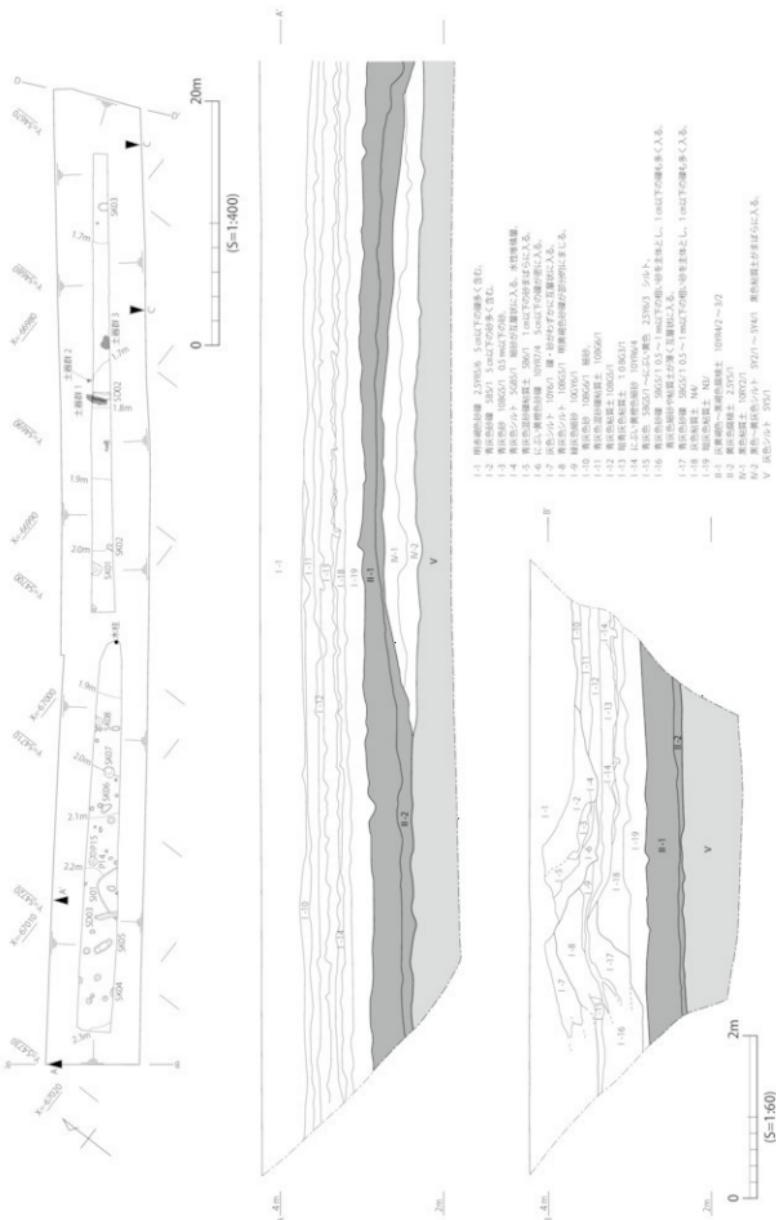
調査区西側は重機により腐植土の上半部まで掘削し、7月14日から人力で掘削作業を行った。腐植土下面から下層の黒色粘質土層では弥生時代後期末頃を主体とする遺物が出土し、灰色系シルト層上面で竪穴建物状遺構や溝、土坑等の遺構を検出した。8月7日にはこれらの遺構を完掘し、調査区の完掘写真を撮影した。その後、調査区壁面の土層図などを作成し、8月12日には三瓶自然館の中村唯史氏より調査区における地質環境や土層の堆積状況について調査指導を受け、8月18日から重機により調査区の埋め戻しを行った。

2. 基本層序

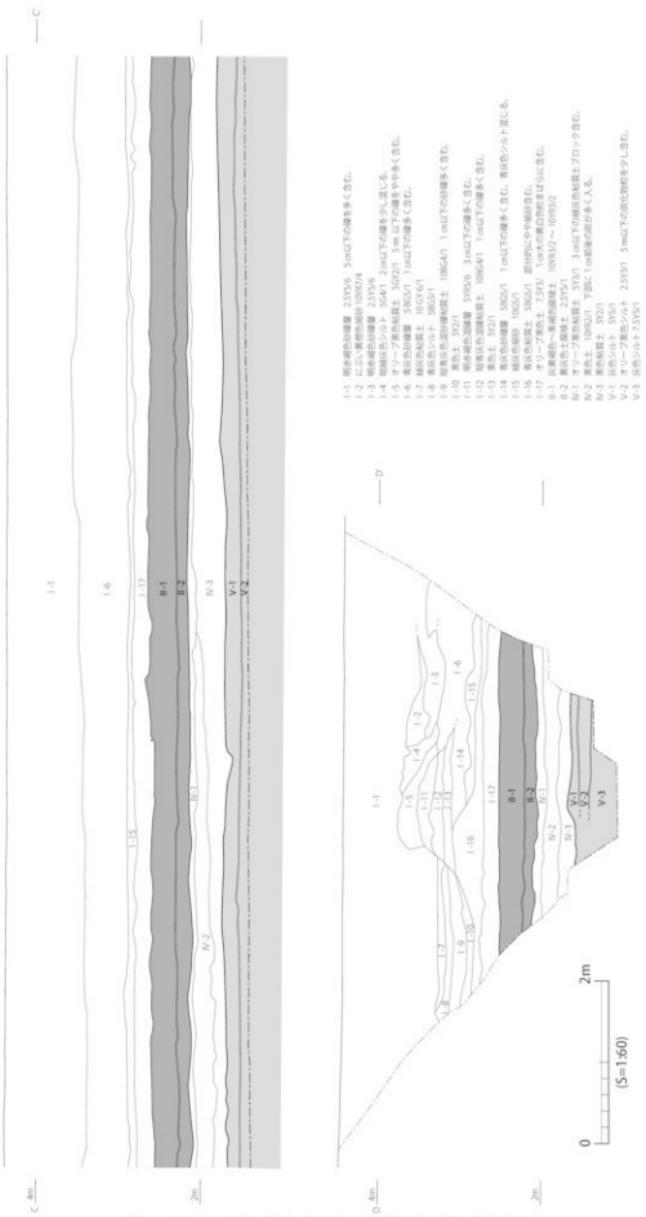
調査区の基本層序は大きく見て4つに大別した。

I層は近世以降の耕作土層や造成土、旧伊努谷川による堆積層などである。これらについては基本的に重機による掘削段階で除去している。ただし、前述したように、調査区東側では第18図I-17層が遺物包含層になる可能性を考え、人力で掘削をした。なお、第17図のI-14層、第18図のI-15層は河川の氾濫によって堆積した細砂層と考えられ、他の調査区でも同様の層が認められる。本調査区から約400m東に位置する2区では、2時期の洪水砂が確認されており、それらのいずれかに対応する可能性が考えられる。

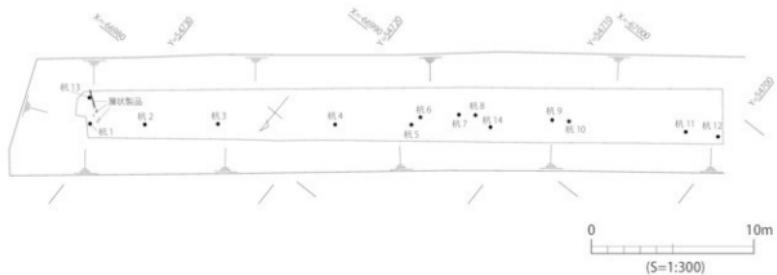
II層は未分解の植物質のものが堆積した黒色腐植土層で、「オモカス層」と呼ばれるものである。この層序は、この地点がアシなどが生い茂る低湿地であったことを示している。出土遺物が少なかったため明確な時期は特定しづらいが、中世頃に形成されたと考えられる。



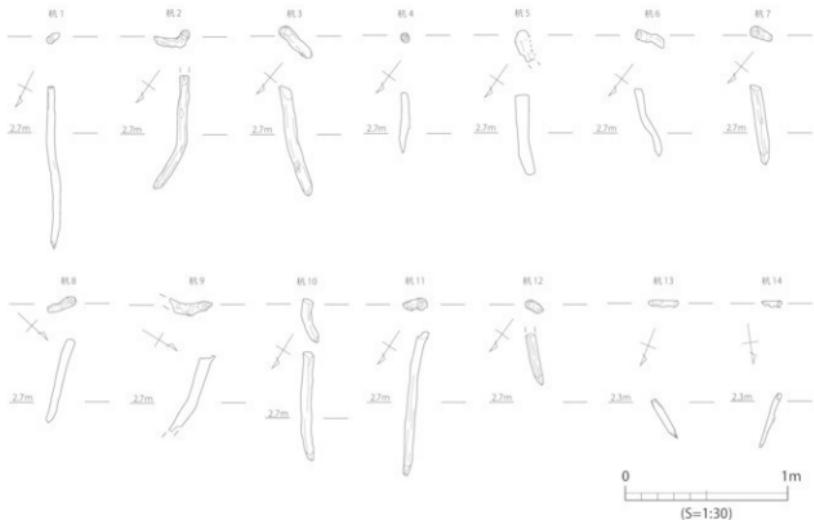
第17図 6区④遺構図、北壁（A-A'）・西壁（B-B'）土層断面図



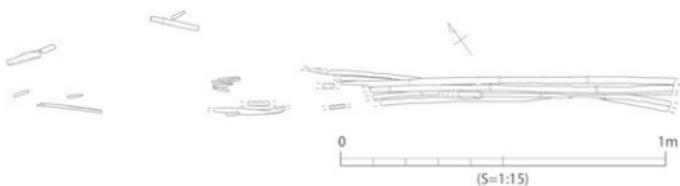
第18図 6区④南壁(C-C')・東壁(D-D') 土層図



第19図 6区④I・II層検出遺構図

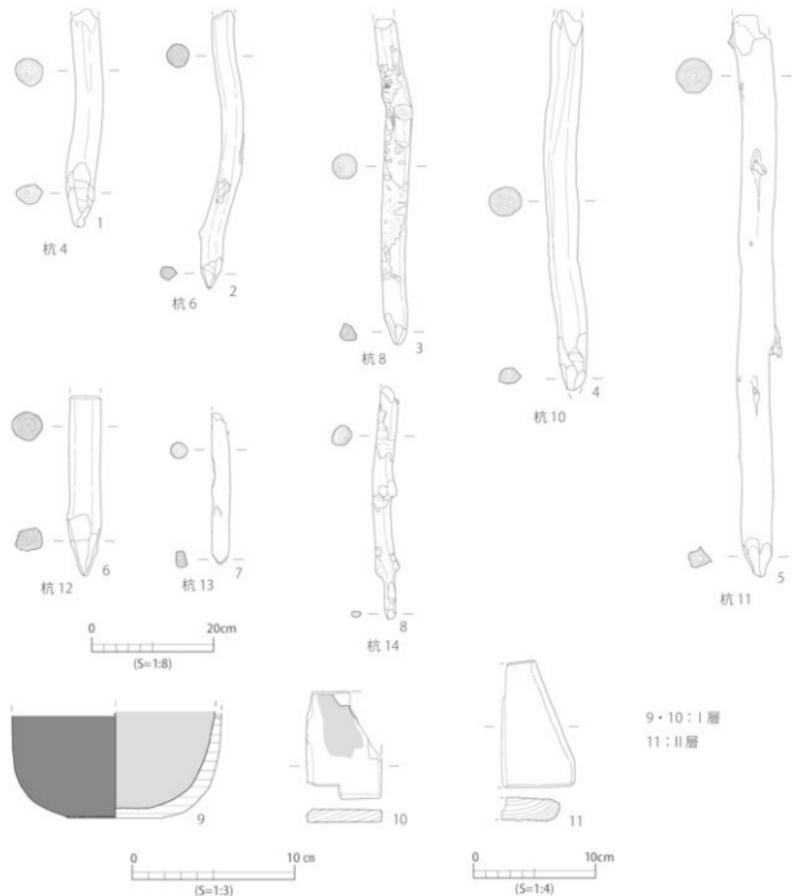


第20図 6区④I・II層検出杭実測図



第21図 6区④簾状製品出土状態

IV層は黒色の粘質土層で、弥生時代後期～古代の遺物を含む。6区①・③・⑤で「シルト系堆積層上部の粘質系の土」とされる層や、6区⑦の「弥生時代後期後半の遺物包含層」に対応する。本調査区では、II層とIV層の境界は漸移的でII層下面付近から遺物が出土している。なお、6区①・③・⑤に見られる「水田耕作土」(6区⑥のⅢ層)に対応する層は本調査区では認められなかった。



第22図 6区④Ⅰ・Ⅱ層出土杭・木製品

V層は灰色のシルト系堆積層で、この上面で弥生時代後期末頃の遺構を検出している。V層中には遺物はほとんど含まれず、この地点においてはシルト層の堆積段階では人間の活動はあまりなかったものと推測できる。

3. Ⅰ～Ⅱ層の調査（第19図）

杭列（第20-22図） 杭1～杭12はI・II層上面で検出されたものである。「杭列」とするにはそれぞれの間隔が大きく開いている部分もあり、これらを一連のものとみなすかためらわれるところだが、ほぼ直線的に並んでいることからその可能性を考えた。本来はもっと多数の杭が並んでいたが、上層を重機で掘削した際に抜けてしまったのかもしれない。杭がどの面で打ち込まれ

たのかはわからない。杭の並びは、推定される旧伊努谷川の流れ方向に沿っていることから、河川の護岸等に伴うもので、時期は中世後半～近世に属すると推測される。なお、杭4については放射性炭素年代測定を行っており、¹⁴C年代は350±20yrBPであった。杭の一部を第22図に図示したが、これらはいずれも径5cm前後の丸太材の先端を加工してとがらせたものである。

杭13・14（第20・22図） これらはいずれもII層の掘削途中で検出されたものだが、どの面から打ち込まれたか特定できない。ただし、I-17層上面では検出されていないので、前述の杭列よりも古いものと考える。杭13は調査区の南東隅で、杭列からはずれた地点に位置している。

簾状製品（第21図） 調査区東端付近のII層上面で検出した。5本の太さ2cm程度のアシが簾状に縫じあわされたもので、長さは2.1m以上あったとみられる。ただし、北西側は発見時には腐朽してほとんど残っておらず、また、残りも脆弱で取り上げが困難な状態であったため現地で記録するのみにとどめた。

その他の出土遺物（第22図） 9・10はI層の河川堆積層から出土した木製品である。9は漆器椀で、外面には黒漆が、内面には赤漆が塗られている。底部は体部との間にわずかな段を持つが、高台ではなく、平底である。10は片闊にえぐりが入る板状の木製品で、箱の一部と考えられる。一部に赤い塗料が残る。11は台形状の平面形を持つ板状木製品で、II層から出土した。

4. IV層～V層上面の調査

IV層からV層上面にかけては弥生時代後期～古代の遺物が出土しており、V層上面では竪穴建物状遺構、溝、土坑などの遺構を検出した。V層上面のレベルは、1.7～2.3mで西側に行くにつれて高くなっている、遺構の分布も西側調査区で多く見られる。

（1）検出遺構

SI01（第23・24図） 西側調査区のほぼ中央に位置する竪穴建物状遺構で、南側は調査区外に続くため、全体を調査することはできなかった。検出時には一辺3.9m以上の隅丸方形の竪穴建物跡になる可能性を考えたが、床面では、長径0.7m、短径0.42m、深さ0.1mの不整梢円形の土坑と、長径0.19m、短径0.17m、深さ0.05mのピットを検出したのみで、柱穴に相当しうるピットや壁体溝などは確認できなかった。

遺物は、古式土器片が埋土から出土している。1は甕の口縁部片で、端部に小さな面を持つ。草田6期に位置づけられよう。2は高杯の脚部片、3は器台の受部片である。これらから、この遺構の時期は弥生時代後期末頃から古墳時代前期初頭と推測される。

SD02・土器群1（第25・26図） SD02は東側調査区の中央で検出された溝状遺構である。調査区に対して直交する方向にのびており、南北はそれぞれ調査区の周囲に掘った排水溝によって切られている。確認できた長さは1.5mで、幅0.7m、深さ0.05mである。

土器群1はSD02の検出面よりも上部で確認したもので、長さ1.8m、幅0.7mの範囲に古式土器片がまとめて出土していた。土器は細かく割れており、おおよその器形をとどめているものがなかったため、遺物の分布範囲のみを記録した。土器群1の出土遺物として第26図に3点を図示した。1は口縁部が先細りの甕で、草田4期のもの、2は外面にベンガラが塗布されたボウル形の鉢である。3はコップ形の体部に、短く外反する口縁部が付くもので、内面のほぼ全体と外面

1 6[図④]及び7[図⑤]の放射性炭素年代測定は、「山特遺跡 Vol.7 (6[図])」(島根県教育委員会 2011) を参照されたい。



第23図 6区④ SI01



第24図 6区④ SI01 出土遺物

の一部には漆膜が付着している。漆採取用の容器であろう。

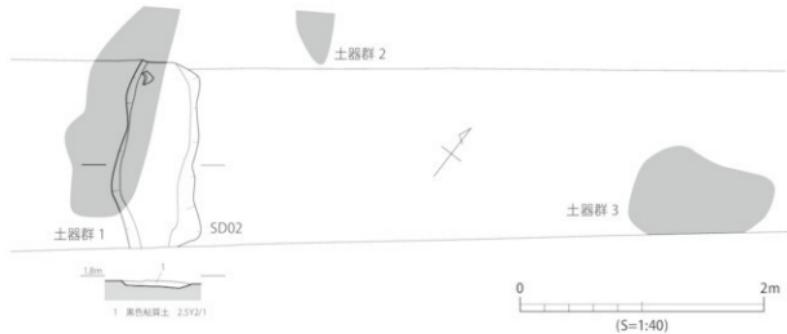
これらの遺物から、SD02 や土器群 1 は弥生時代後期末頃の遺構と考えられる。

土器群2・3（第25・26図） 土器群2はSD02から1mほど東側にあり、 $0.3m \times 0.4m$ の範囲に土器片がまとまって出土した。土器は細かく割れており、出土時にはもとの器形をうかがうことできなかったが、その後の整理作業で古式土師器の縁が口縁部から胴部上半まで直径の1/2程度復元できた（第26図4）。口縁部は上半がやや内傾する複合口縁もので、端部には面を持っており、肩部には平行直線文が施されている。草田7期頃のものとみられる。

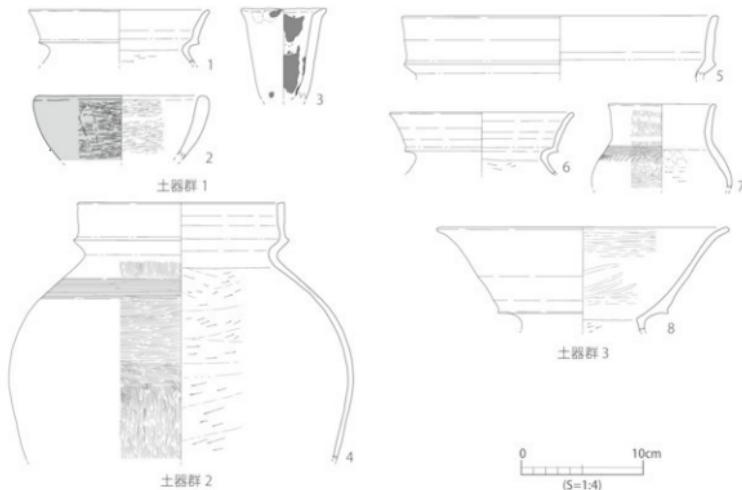
土器群3は、SD02から4m東側にあり、細かく割れた土器片が $1.2m \times 0.7m$ の範囲で検出された。出土遺物として古式土師器4点を図示した。5・6は縁の口縁部で、草田5期のものとみられる。7は直口縁壺で、肩部には平行直線文や、刺突文が巡る。8は鼓形器台の受部である。

SD03（第27図） 西側調査区の中央からやや西寄りに位置し、SI01を切って掘り込まれた溝状遺構である。南北方向にのびており、南側は調査区周囲の排水溝で切られている。現状での長さは2m、幅は0.5m、深さは0.1mである。埋土は黑色土と暗灰黄色土の2層に分けられる。

SK01（第27図） 東側調査区の西側に位置する。調査区周囲の排水溝で北側が切られており、現状での規模は $0.96m \times 0.87m$ 、深さが0.42mである。北側が高くなつてから再び落ち込むかたちになっており、複数の土坑が切り合っていた可能性もある。



第25図 6区④ SD02, 土器群1~3

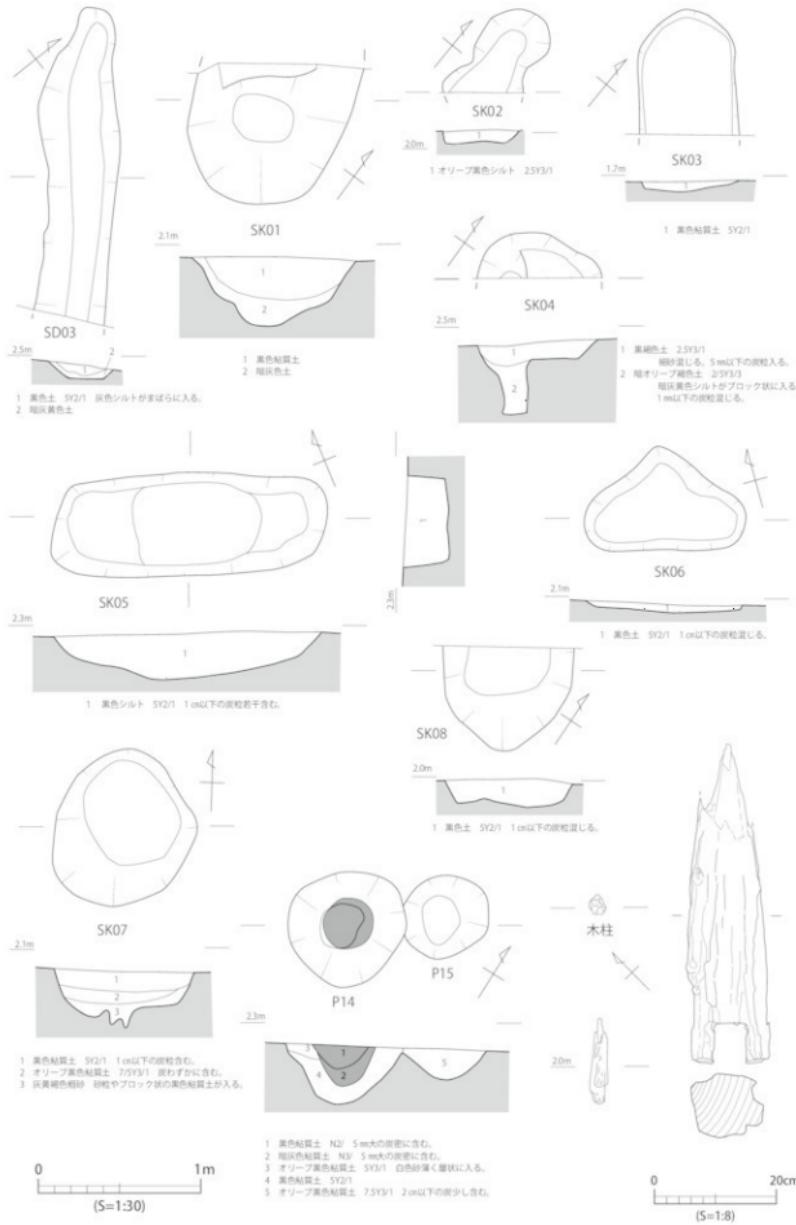


第26図 6区④土器群1~3出土遺物

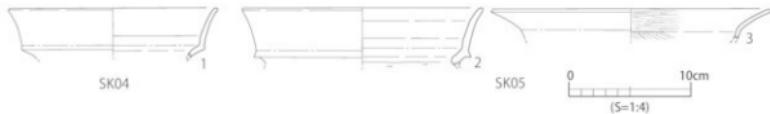
SK02（第27図） SK01から約2m東側に位置する、不整形の土坑である。調査区周囲の排水溝によって北側が切られており、現状での規模は0.66m×0.4m、深さは0.1mである。

SK03（第27図） 東側調査区の東端付近に位置する。現状での長さは0.8m、幅0.6m、深さは0.05mであるが、南側は調査区周囲の排水溝に切れられているため本来の形状は不明である。

SK04（第27・28図） 西側調査区の西端近くに位置する。南側が調査区周囲の排水溝によって切られており、本来の形状は不明であるが、現状では東西0.77m、南北0.3mの大きさである。底面は2段になっており、東側は深さ0.1mであるのに対し、西側は0.4mと深くなっている。埋土中から古式土器片が出土している。第28図1は複合口縁の甕で、口縁部は全体として薄く、緩やかに外反しており、端部を丸く収めている。草田5期のものである。出土遺物から遺構の時期は弥生時代後期末頃と考えられる。



第27図 6区④ SD03、土坑・ピット、木柱



第28図 6区④ SK04・05 出土遺物

SK05（第27・28図） 西側調査区で、SD03から約2m西側に位置する。長さ2.04m、幅0.63m、深さ0.27mの隅丸長方形の土坑で、底面からの立ち上がりは、長辺側は垂直に近いが、短辺側は緩やかである。埋土中から古式土師器片が出土している。第28図2は複合口縁の甕で、3は高杯で口縁部は体部から強く屈曲して開くものである。これらは草田4期に位置付けられよう。出土遺物からこの遺構の時期は弥生時代後期末頃と推定される。

SK06（第27図） 西側調査区の中央からやや東寄りに位置する。長さ1m、幅0.65m、深さ0.04mの不整形な土坑である。

SK07（第27図） SK06から約2.5m東に位置する。長径1m、短径0.9m、深さ0.25mの不整形円形の土坑である。埋土は3層に分かれ。最下層は黒色粘質土ブロックを含む灰黄褐色粗砂で、部分的に底面に嵌入している。

SK08（第27図） SK07から約4m東側に位置する。北側を調査区周囲の排水溝に切られており、本来の形状は不明であるが、現状で東西0.8m、南北0.65m、深さは0.18mである。埋土は黒色粘質土で、1cm以下の炭化物粒を含む。

P14・15（第27図） P14はSI01から1.2m北側に位置する。長径0.74m、短径0.72m、深さ0.35mの不整形円形のピットである。検出時には、中央部に炭粒を多く含んだ濃い黒色粘質土が径0.3mの円形の輪郭を持って現れたため、この部分について柱痕か柱抜き取り痕の可能性を考えたが、土層は凸レンズ状に堆積しており、P14の埋没後に別のピットが掘り込まれたのかもしれない。

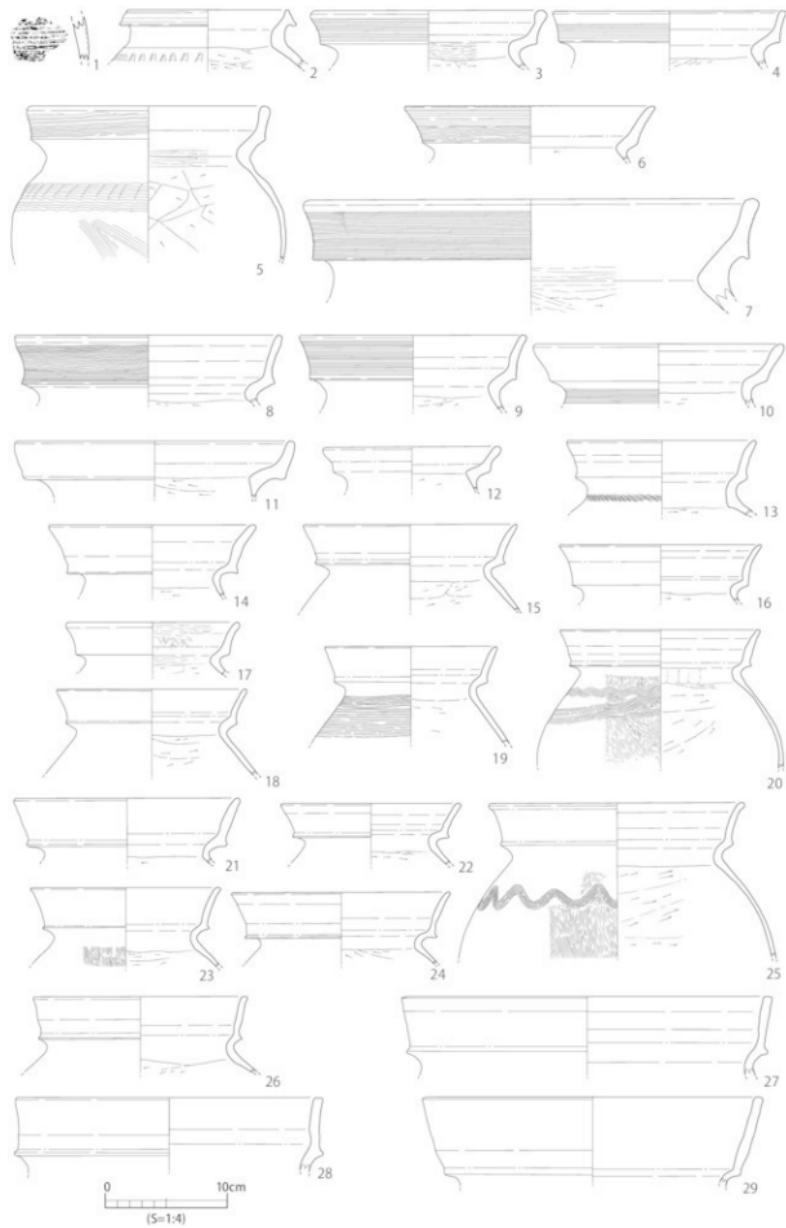
P15は長径0.55m、短径0.5m、深さ0.2mの不整形円形のピットで、P14に切られている。

木柱（第27図） 西側の調査範囲の東端に位置する。残存長52.2cmの木柱が立った状態で検出されたもので、周囲を精査したがこれに伴う柱穴は確認できなかった。柱は、大径材を分割して加工したもので、下端には抉りが入れられている。樹種はカヤ属である。

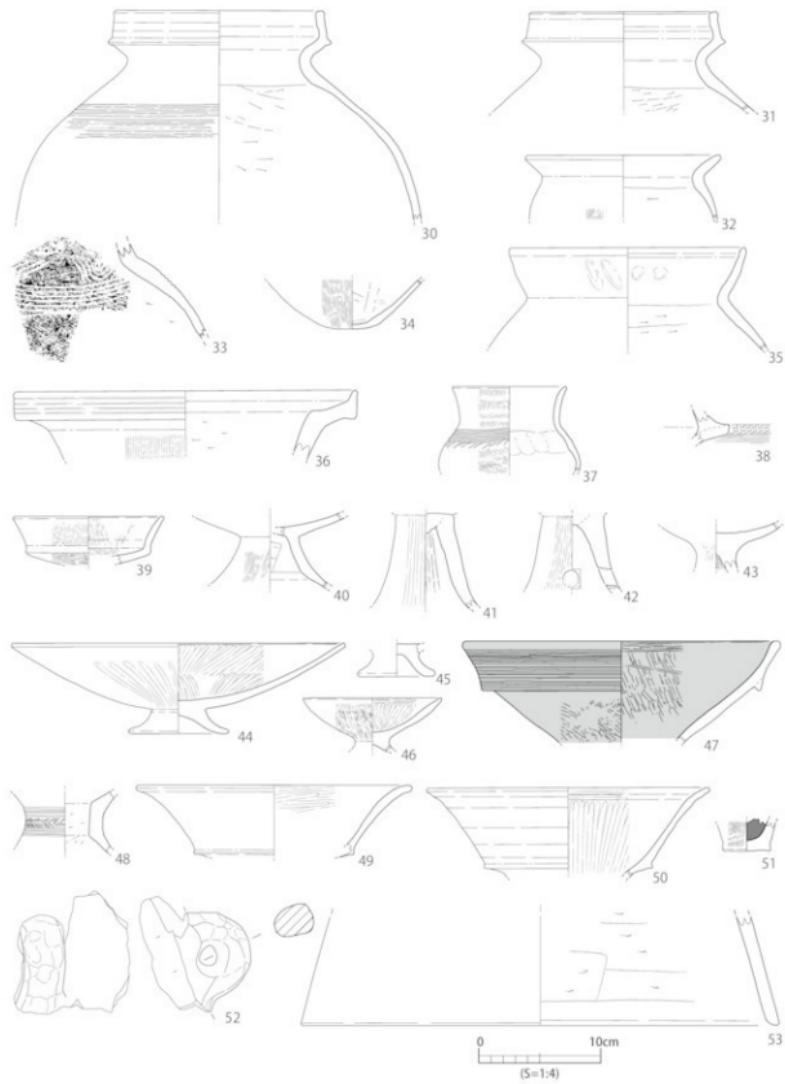
（2）遺構に伴わない遺物（第29～32図）

基本層序の項でも述べたように、II層下面付近からV層上面にかけて弥生時代後期から古代の遺物が出土しているが、II層からIV層の変化は漸移的であることや、下部へ行くほど古い遺物が多くなる傾向はあるものの、取り上げた層位によって明確な時期差を見出しづらいことから、II層下部で出土したものもここに含めて説明することとした。

弥生土器・古式土師器・土師器（第29・30図） 1～13は弥生土器の甕である。1は肩部に櫛描直線文が施されたII様式のものである。2は短く内傾する口縁部に2条の凹線文が入るもので、肩部に刺突文が巡る。V-1様式に位置付けられる。3～9は口縁部に貝殻による平行直線文が施されており、3～5はV-2様式、6～9はV-3様式のものと考えられる。5は肩部に貝殻による押引状の波状文が施されている。10～13は無文の複合口縁のものであるが、10～13は口縁部が全体に厚みがあることからV-2～3様式に属すると考えた。36はV-1様式の壺で、短く立ち上がる口縁部に、4条の凹線が巡る。47・48は器台で、47はV-2様式、48はV-3様式



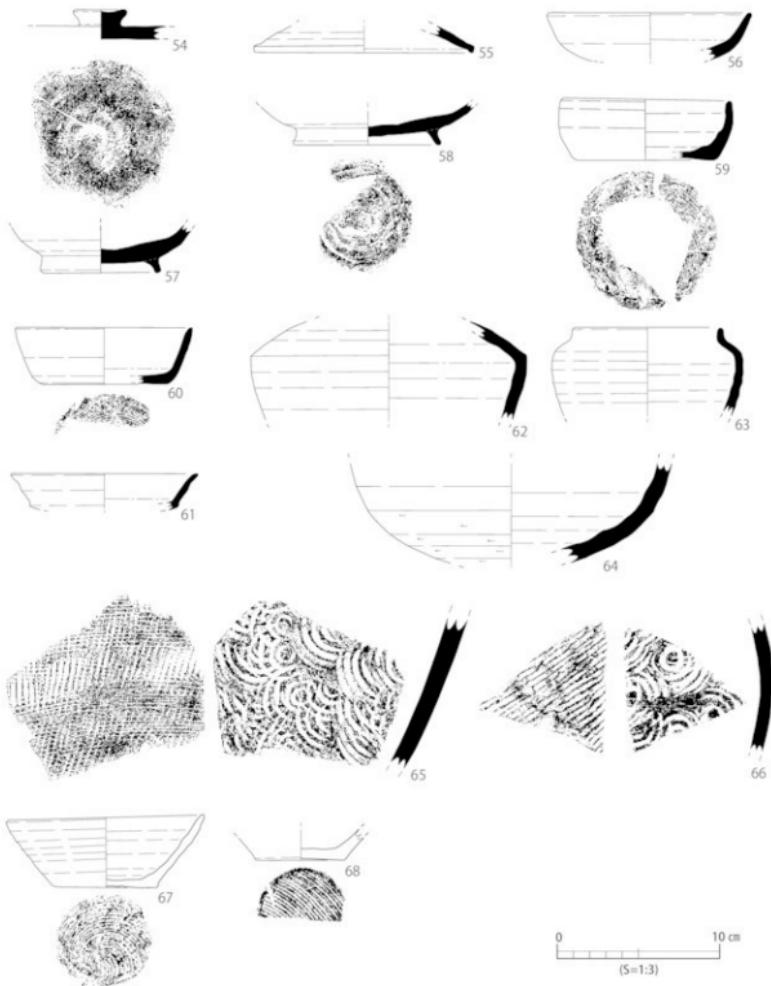
第29図 6区④IV層出土遺物（1）



第30図 6区④IV層出土遺物（2）

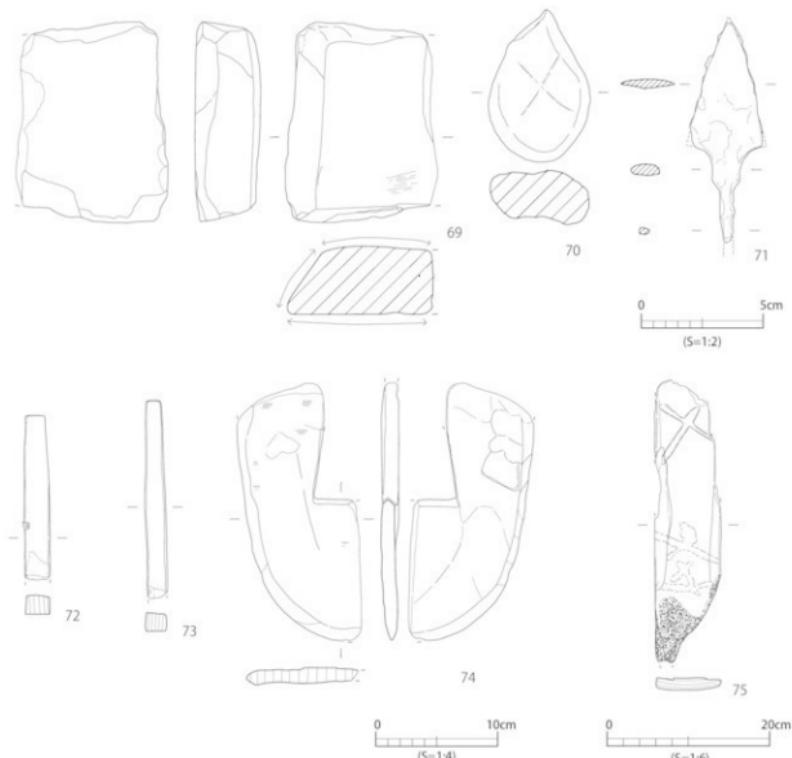
のものである。47は内外面に赤色顔料（水銀朱）が塗布されている。

14～32は古式土師器の甕である。14～21は口縁部が外反しながら、先すぼまりになるもので草田4期頃に、22～26は口縁端部が丸みを持つもので、草田5期に位置付けられよう。27～



第31図 6区④IV層出土遺物（3）

29はやや大型の甕で、口縁端部に面を持つ。草田5～6期のものと推測する。30・31は口縁部が内傾する複合口縁のもので、口縁端部は肥厚しており、草田7期まで下るものとみられる。32は単純口縁の甕で、胎土に大粒の砂礫を含んでおり、在地のものではなく西部漸戸内系の土器の可能性がある。33は壺もしくは甕の肩部で、条間の広い櫛描の直線文と波状文が施されている。34は壺・甕類の底部で、痕跡的な平底を持つものである。35は単純口縁の土師器の甕で、口縁端部が内側に肥厚する。古墳時代中期に位置付けられよう。37は古式土師器の直口縁壺である。



第32図 6区④IV層出土遺物(4)

38は口縁部が内傾し、口縁部下端に刺突文が入る複合口縁壺で、西部瀬戸内系の土器と考えられる。39～42は古式土師器の高環、44～46は低脚环、49・50は鼓形器台、52・53は瓶形土器である。43は土師器の高環で、古墳時代中期から後期のものと考えられる。

須恵器・古代の土師器(第31図) 54・55は坏蓋で、岡田編年の出雲IV A期頃のものである。56～60は坏身で、56～58はII～III期、59はIII期以降、60はIV A期のものとみられる。57は焼成前に内面に「×」の線刻がなされている。61は皿、62は長頸壺の肩部、63は短頸壺、64は鉢である。65・66は甕の胴部片で、外面に平行タタキ目が、内面には同心円当具痕が残る。67・68は古代の土師器で、底部切り離しは、67は回転糸切り、68は静止糸切りでされている。

石製品(第32図) 69は砥石で、3面の砥面がある。70は軽石に「×」の線刻がされている。

鉄製品(第32図) 71は鐵鎌で、二等辺三角形形状の鎌身部を持つ。

木製品(第32図) 72・73は角棒状の加工材である。74は鋤身もしくは鍛身で、材は広葉樹である。着柄のために三角形の穿孔をもつ。75は板状木製品である。「×」状に周りと比べて少し浮きあがった部分や、色の異なる部分があるが、加工あるいは使用によるものかどうかは不明である。